

参加型授業を受講した学生の満足度と学習意欲に関する考察

曾山和彦
教職センター

A Study on the Relationship between Satisfaction and Learning Motivation of the Student take Interactive Lecture

Kazuhiko Soyama
Center for Teacher Education

The purpose of this study was to investigate the relationship between satisfaction and learning motivation of the student take interactive lecture that utilized Structured Group Encounter. The survey was conducted for 187 students who studies the teacher-training course. The results were as follows: (1) Factor analysis about class satisfaction indicated that there were three factors, "device of participation and the concentration", "clear statement of an aim and the standard", "technical practical contents". (2) Regarding interactive lecture, there are many students with high feeling of satisfaction. (3) The students satisfied with interactive lecture tend to have high learning motivation. The present results showed that interactive lecture was effective to raise feeling of satisfaction and learning motivation.

Keyword : interactive lecture, Structured Group Encounter, class satisfaction, learning motivation

1. 問題と目的

「大学生は全く勉強しない」、「大学生の学力は低下している」等の言葉を新聞、テレビ等のマスコミを通して耳にすることが多い。この言葉を裏付けるように、社団法人私立大学情報教育協会による「平成 19 年度私立大学教員の授業改善白書」¹⁾(2008)では、全国私立大学 334 校、21797 名の教員の声として、「基礎学力がない(56.3%)」、「学習意欲がない(37.2%)」等の学生の問題点が示されている。しかし、本当に現代の学生は学ぶことに対する意欲や学力

が低下していると言えるのだろうか。筆者は本学で主に 1、2 年の教職履修学生の授業を担当しているが、授業における学生の参加態度等を見ている限り、上記の指摘は必ずしも当てはまらないのではないかと感じている。また、仮に上記の指摘が言葉通りであったとしても、学生の状況をそのままにしてよいはずはなく、教師として指導上の工夫が強く求められているということになる。現代の学生の実態について、河地²⁾(2005)は、首都圏の学生 2104 名を対象にしたデータから次のような分析・提言を行ってい

る。学生の実態については、「授業・ゼミ」、「資格取得のための勉強」に重点を置く学生の多さから、「もっと勉強したいと思っている」学生は、世間一般の評価以上に多いだろうと指摘している。また、大学の授業については、「討論・プレゼンを含めた学生参加型の授業」に関する学生の要望の多さから、「教員が一方的に話し、学生はノートをとるという形式ではなく、学生が発言し、質問し、自分の考えを形作ってゆく授業」の導入こそ必要であろうと提言している。こうした河地²⁾(2005)の指摘・提言を待つまでもなく、すでに、大学授業の活性化を研究テーマに複数の実践研究が積み上げられてきている。それは、生徒同士が共有する目標を達成するために一緒に取り組むことにより、自分の学習と互いの学習を最大に高めようとする「協同学習(ジョンソン³⁾、1998)」の考え方に基づく実践であり、杉江⁴⁾(2000)、南⁵⁾(2004)、関田⁶⁾(2005)らの実践が代表的なものとして挙げられる。これらの実践では、いずれも学生の学習意欲・学習態度が良好であることが効果として示されている。

以上、先行研究の知見等を受け、本研究では、筆者の担当する「教職入門」、「学校教育相談」、「特別活動の研究」の各授業において参加型授業を実施するものである。具体的には、学生同士の意見交換、ふれあい等の相互交流が促されるよう、構成的グループエンカウンターの手法を取り入れた授業を実施する。構成的グループエンカウンターとは、心理的な課題であるエクササイズの体験と事後のメンバー同士によるシェアリング(分かち合い、振り返り)を通して、集団内のリレーション(ふれあい)及び個々の自己発見を促進することをめざす、集団カウンセリングの一技法である。「構成的」の名が示すとおり、リーダーが時間、人数、課題等の「枠」を提示しながらグループ活動を展開することから、時間割に沿って日常生活が流れる学校現場にはなじみやすく、「教師が使えるカウンセリング」として注目度の高い技法である。現在、小中学校現場を中心に、児童生徒の人間関係づくりを促進する技法として、協同学習同様に実践研究の積み上げがなされてきている⁷⁾(河村、2001、⁸⁾曾山、2004、⁹⁾小野寺・河村、2005)ものであることから、本研究においても授業展開の中に取り入れることとした。本研究では、構成的グループエンカウンターを取り入れた参加型授業の受講学生を対象に、参加型授

業の満足度と学習意欲の関係について、質問紙調査により明らかにすることを目的とするものである。

2. 方法

2-1. 調査対象

調査対象は、筆者の担当する教職課程の授業受講者(1、2年生)187名。人数の内訳は、「教職入門」(1年生48名)、「学校教育相談」(2年生115名)、「特別活動の研究」(2年生24名)の授業中に質問紙を配布し、10分間の回答時間後、回収した(回収率100%)。項目に記入漏れのあるデータを除き、178名分を分析対象とした。内訳は、男女別では男子122名、女子56名であった。また、学年別では、1年生40名、2年生138名であった。

2-2. 手続き

対象者に対して、講義時間中に質問紙を配布・回収した。なお、質問紙は個人の特定制ができないよう、無記名とした。

2-3. 調査時期

2008年7月。各対象授業の後半(13回目)の授業時間に調査を実施した。

2-4. 質問紙の構成

本研究では、以下の2つの測定尺度を用いて、質問紙を構成した。

2-4-1. 授業満足度尺度

二宮他¹⁰⁾(2004)によって作成された「大学授業観尺度」22項目の中の第1因子である「授業に対する積極的な要望」11項目、及び本学FD委員会による授業満足度アンケート15項目を参考に重複する内容を除き作成された15項目を用いた。具体的には「あなたは参加型授業である本授業に対してどのように感じていますか」という教示に対して、5件法(全くそう思わない:1~大いにそう思う:5)で回答を求めた。

2-4-2. 意欲低下領域尺度

下山¹¹⁾(1995)により作成された15項目を用いた(Table 1)。この尺度は、勉強への興味を失い、学業領域に関す

る意欲低下を示す 5 項目からなる「学業意欲低下」、授業領域に関する意欲低下を示す 5 項目からなる「授業意欲低下」、大学キャンパスへの所属感がなく大学領域に対しての意欲低下を示す 5 項目からなる「大学意欲低下」の 3 つの下位尺度から構成される。具体的には、「大学生活全般について、あなたはどのように感じていますか」という教示に対して、4 件法（全くそうではない：1 ～大いにそうである：4）で回答を求めた。各下位尺度の得点の範囲は、いずれも 5 点から 20 点であり、得点が高いほど意欲低下が高いとした。

2 - 5 . 参加型授業の構成

本研究で実施した参加型授業の構成について、90 分の主な流れを Table 2 に示した。本参加型授業は、構成的グループエンカウンターを取り入れた授業である以上、その骨子であるエクササイズとシェアリングが授業時間内にバランスよく組み込まれるように配慮した。

まずはじめに、「バースデーライン」等のショートエクササイズを活用してグルーピングから授業をスタートするようにした。エクササイズ「バースデーライン」とは、グループ内の雰囲気づくりも兼ね、言葉を使わずに誕生日の順番に整列してグループをつくるエクササイズである。グループの人数は当日の授業内容によって異なるが、概ね 2 ～ 6 名で構成した。次に、グループ毎に座った席の隣同士で学部、名前を確認後、前時に学んだ知識に関する質問（課題）を投げかけ、二人で話し合いながら答えを確認させた。二人で確認した後に順番に発表させ、質問に関する答えをクラス全体で確認するようにした。その後、本時の内容に関する知識・理論の講義を行った後、関連するエクササイズにグループで取り組むようにした。例えば、「私のお願いを聞いて」は、ねらいを「自己主張（アサーション；自己尊重のコミュニケーションスタイル）」に置くエクササイズである。はじめに 4 人グループをつくり、その中でさらにペアになり、ロールプレイを行った。そして、グループ内でペアを交代しながらロールプレイを数回実施後、ねらいに関して気づいたことや感じたことを自由に話し合うシェアリングを行うようにした。さらに、エクササイズの中での個々の気づきをクラス全体で共有できるよう、随時、発表させるようにした。最後に 90 分間の授業を振り返り、

感想、気づき、質問などを個々に振り返り用紙に記入・提出させて終了とした。

なお、本研究で活用した構成的グループエンカウンターエクササイズ「私のお願いを聞いて」等は、市販のエクササイズ集（國分¹²⁾、1999）に掲載されている。

3 . 結果

3 - 1 . 授業満足度尺度の因子分析結果

授業満足度尺度の質問項目の検討に関しては、設定した 15 項目間の相関関係をもとに共通因子を探るため、178 名の有効回答者全体のデータをもとに、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子軸の回転にプロマックス回転を採用した理由は、因子間の相関が予想されたためである。因子負荷量が .35 以下の 1 項目、「聞くことによって理解が深まる授業である」を除き、3 因子、14 項目を「授業満足度尺度」として設定した（Table 3）。

因子 1 は 7 項目からなり、「板書は資料などの準備が十分になされた授業」、「教師の熱意や意欲が感じられる授業」等の項目であることから「参加・集中の工夫」と命名した。因子 2 は 4 項目からなり、「成績評価の基準が明示された授業」、「シラバスに示された内容が満たされた授業」等の項目であることから「目標・基準の明示」と命名した。因子 3 は 3 項目からなり、「教養や専門性を身につけられる授業」、「自分の将来に役立つ授業」等の項目であることから「専門的・実践的な内容」と命名した。各下位尺度の得点の範囲は、「参加・集中の工夫」は 7 点から 35 点、「目標・基準の明示」は 4 点から 20 点、「専門的・実践的な内容」は 3 点から 15 点であり、いずれも得点が高いほど授業満足度が高いとした。また、各尺度について、クロンバックスの α 係数により信頼性の検討を行った。その結果、因子 1 から因子 3 にかけて、 α 係数はそれぞれ、.84、.74、.74 であり、比較的高い信頼性が示され、内的整合性はおおむね確認されたと考えられる。

3 - 2 . 授業満足度の分布

有効調査回答 178 名分のデータをもとに、授業満足度の高群、中間群、低群の 3 群に学生を分類した。具体的には、授業満足度得点の平均値から 1/2 標準偏差内の得点の学生を「授業満足度中間群」とし、中間群より得点の高い学生

を「授業満足度高群」、中間群より得点の低い学生を「授業満足度低群」とした。3群の授業満足度得点の平均、標準偏差、分布を Table 4 に示す。この結果からは、授業満足度を3群に分けた場合、授業満足度高群が多く(38.8%)、授業満足度低群が少ない(28.1%)ということが示された。

次に、授業満足度尺度の3つの下位尺度についても、各尺度得点をもとに、同様な手続きを経て高中低群の3つに分類した。各下位尺度の授業満足度得点の平均値、標準偏差、分布を Table 4 に示す。「参加・集中の工夫」に関しては授業満足度高群(38.8%)、授業満足度低群(25.8%)、「目標・基準の明示」に関しては授業満足度高群(31.5%)、授業満足度低群(27.5%)、「専門的・実践的な内容」に関しては授業満足度高群(48.9%)、授業満足度低群(31.5%)の分布であった。この結果からは、授業満足度尺度の3つの下位尺度をそれぞれ3群に分けた場合、いずれも授業満足度高群が多く、授業満足度低群が少ないということが示された。

3 - 2 . 学生の授業満足度と学習意欲の関係

参加型授業を受講した学生の授業満足度と学習意欲低下の関係について明らかにするために、授業満足度、学習意欲低下間の相関係数を算出した(Table 5)。この結果、授業満足度と学習意欲低下の間には、低い負の相関($r=-.22$ 、1%有意)があることが示された。さらに、授業満足度の3つの下位尺度と学習意欲低下の3つの下位尺度の間には、「参加・集中の工夫」と「授業意欲低下($r=-.17$ 、5%有意)」、「大学意欲低下($r=-.25$ 、1%有意)」の間に、「目標・基準の明示」と「大学意欲低下($r=-.20$ 、1%有意)」の間に、「専門的・実践的な内容」と「授業意欲低下($r=-.18$ 、5%有意)」、「大学意欲低下($r=-.19$ 、5%有意)」の間に、いずれも低い負の相関があることが示された。

4 . 考察

本研究の結果から、参加型授業を受講した学生の授業満足度と学習意欲の関係について考察を加えたい。

本学に限らず、多くの大学・短期大学に投げかけられた課題の一つとして授業改善が挙げられる。文部科学省¹⁵⁾(2006)は、従来の講義中心の指導スタイルの不十分さを

指摘し、社団法人私立大学情報教育協会(2008)も「学習意欲を高める授業の設計」、「学生の理解度に応じた授業の設計」、「対話を重視した授業の徹底」等を今後の課題として指摘している。現在、大学で学生を指導する全ての教師は、これらの指摘を真摯に受け止め、自分自身の指導スタイルを振り返ることが求められているといえよう。首都圏の学生を対象に実態調査を行った河地²⁾(2005)は、一人の学生の、「先生は自分が専門にしていることについて、その面白さを伝えることがあまりない。自分が長年研究したり勉強したりしていることなのに、その研究の面白さを伝えられないってどうしてかと思議に思う」という声を紹介している。言葉の裏を返せば、「学ぶことの面白さを教えてほしい」という声であり、教師はその声に真摯に答える必要があるだろう。本研究は文部科学省等の指摘、学生の声に応えるべく、構成的グループエンカウンターを活用した参加型授業を実施し、その満足度を学生の学習意欲との関係で検討したものである。結果からは、授業満足度を構成する因子として、「参加・集中の工夫」、「目標・基準の明示」、「専門的・実践的な内容」の3因子が抽出され、それらを含む参加型授業に対する満足度高群は、満足度低群よりも多いということが示された。この点に関しては、構成的グループエンカウンターのエクササイズやシェアリングを取り入れた授業展開が「参加・集中の工夫」の面で学生の満足度を高め、理論の説明だけにとどまらずエクササイズを通じた体験的な活動が「専門的・実践的な内容」の面で学生の満足度を高めることにつながったのではないかと推測される。また、授業満足度と学習意欲の関係においては、授業満足度と学習意欲低下の間に低い相関が認められ、特に、学習意欲低下下位尺度の「授業意欲低下」と「大学意欲低下」に対して、授業満足度下位尺度の「参加・集中の工夫」、「目標・基準の明示」、「専門的・実践的な内容」が関係していることが示された。これは、授業満足度が高い学生は学習意欲低下が抑えられているということ、構成的グループエンカウンターを取り入れた参加型授業の中で「参加・集中の工夫」、「目標・基準の明示」、「専門的・実践的な内容」に満足を感じた学生は、授業そのものに向かう「授業意欲」や学内での対人交流・所属感を持ちたいという「大学意欲」の低下が抑えられているということを示唆するものである。それゆえ、講義形式による受

け身の授業ではなく、学生と教師、学生同士のかかわりが随所に盛り込まれた参加型授業は、学生の学習意欲を高めるための一方策として効果があるということが示唆されたのではないかと考えられる。大学授業の活性化をめざした実践研究としては、杉江⁴⁾(2000)、南⁵⁾(2004)、関田⁶⁾(2005)らの先行研究があるが、研究論文の形にその効果を整理したものは決して多いとはいえず、今後の研究蓄積を待つことになる。本研究の意義は、先行研究に続き、参加型授業の有効性を示唆した点にあると考えられる。

5. 今後の課題

最後に本研究の課題について2点述べたい。第1点は満足度尺度に関する課題である。本研究では、二宮他(2004)の「大学授業観尺度」及び本学FD委員会による授業満足度アンケートを参考に尺度を作成し、因子分析の結果を経て授業満足度尺度を設定した。主因子法、プロマックス回転の分析過程により、因子のまとまりのよさを考慮し、因子負荷量.35以上で項目を設定したものである。因子負荷量としては昨今、.40以上を設定している研究が多いということらを考慮すれば、今後は、「満足する授業とはどのような授業か」という観点で、学生からの聴き取り、自由記述アンケート等を行い、項目を追加した上で再度分析等の検討を加える必要がある。第2点は、意欲領域低下尺度に関する課題である。本研究では、授業満足度との関係について分析を行ったが、「授業意欲低下」、「大学意欲低下」に関して相関が認められたものの、「学業意欲低下」に関しては相関が認められなかった。また、相関が認められたとはいえ、数値としては.20前後の低い数値に留まっている。この点については、下山¹¹⁾(1995)が作成した同尺度をそのままの形で使ったことによる影響の可能性も考えられる。尺度作成からある程度の年数が経過していることも考慮し、現在の学生データをもとに、因子分析等の手順による尺度の検討も今後の課題としたい。

6. 参考・引用文献

1)社団法人私立大学情報教育協会 2008 平成19年度私

立大学教員の授業改善白書

2)河地和子 2005 自信力が学生を変える - 大学生意識調査からの提言 平凡社

3)ジョンソン, D.W・ジョンソン, R.T・ホルベック, E.J・杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤(訳) 1998 学習の輪 - アメリカの協同学習入門 - 二瓶社

4)杉江修治 2000 学生主体の双方向授業づくり 中京大学教養論叢, 40の3, 189-198

5)南紀子 2004 実践事例2 ~ 共に学び合える英語学習 (杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編 大学授業を活性化する方法) 玉川大学出版部, 86-95

6)関田一彦 2005 集中講義「教育心理学」が受講者の心理的態度に与える影響 創価大学教育学部論集, 56, 研究ノート, 71-78

7)河村茂雄 2001 構成的グループエンカウンターを導入した学級経営が学級の児童のスクール・モラルに与える効果の研究 カウンセリング研究, 34, 153-159

8)曾山和彦 2004 不登校傾向生徒に及ぼす構成的グループエンカウンターの効果 ~ Self-esteem, 社会的スキル, ストレス反応の視点から ~ 秋田大学教育文化学部研究紀要, 59, 51 ~ 61

9)小野寺正己・河村茂雄 2005 ショートエクササイズによる継続的な構成的グループエンカウンターが学級適応に与える効果 カウンセリング研究, 38, 33-43

10)二宮克美・桑村幸恵・稲葉小由紀・山本ちか 2004 大学生の授業に対する意識(1)大学授業観と大学適応感との関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 13, 146-147

11)下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155

12)國分康孝 1999 エンカウンターで学級が変わる中学校編 図書文化社

13)文部科学省 2006 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」(答申)

Table 1 意欲低下領域尺度

< 学業意欲低下 5項目 >

- 教師に言われなくても自分から進んで勉強する（*）
- 勉強に関する本を読んでもすぐに飽きてしまう
- 勉強で疑問に思ったことはすぐ調べる（*）
- 必要な単位以外でも関心のある授業はとるようにしている（*）
- 大学で勉強をすることで自分の関心を深めている（*）

< 授業意欲低下 5項目 >

- 授業に出る気がしない
- 朝寝坊などで授業に遅れることが多い
- 何となく授業をさぼることがある
- 大学からの連絡事項を見落としてしまうことが多い
- 授業の仮題の提出が遅れたり、出さなかったりすることがある

< 大学意欲低下 5項目 >

- 学生生活で打ち込むものがない
- 大学ではいろいろな人と交流がある（*）
- 大学にいるより、自分一人でいるほうがいい
- 大学での時間は自分の生活の中で有意義な時間である（*）
- 大学のなかで自分の居場所がないと感じる

* 逆転項目

Table 2 構成的グループエンカウンターを活用した参加型授業（90分）の主な流れ

時間(分)	学習活動	指導上の留意点
5	本時の学習について見通しをもつ	・本時の学習についての「ねらい」、「内容」について簡潔に伝える。
10	ペアをつくる	・いろいろな学生同士がかかわりをもてるよう、「バースデーライン（非言語による誕生日整列）」、「フリーウォーク（非言語による1分間の自由歩行）」等、SGEのショートエクササイズを用いたり、座席の前後左右の学生同士をシャッフルしたりして、ペアをつくるようにする。
10	前時の学習内容の復習をする	・前時の学習内容から複数の課題を提示し、ペアで話し合いをしながら回答を導くよう、働きかける。（課題例；「いじめの4層構造とは何か？」等）
60	本時の内容について知る・理解する	<ul style="list-style-type: none"> ・重要事項については、記憶の定着が図りやすいよう、配付資料内に空欄部を設定し、自ら書き込む書式の工夫をする。 ・学生が資料に記入している際には、机間巡視を行い、寝ている学生、メールをしている学生等に声をかけるようにする。 ・知識や理論に関する説明後、それらの定着に向け、ペアあるいは前後の4人組、6人組等によるSGEのエクササイズ・シェアリングを随時行うようにする。（例；アサーション＜自他尊重のコミュニケーションスタイル＞理論について説明後、ペアによるエクササイズ「私のお願いを聞いて」を実施。その後、ペアによるシェアリングを行い、さらに前後4人でのシェアリングに広げる等）
5	本時の学習を振り返り、シートに記入する	・本時の学習についての気づき・感想・質問等を記入するシートを用意する。

* 表内アンダーライン部が構成的グループエンカウンター（structured group encounter = SGE）を活用した部分である。

Table 3 授業満足度尺度の因子分析結果

質問項目	共通性			
参加・集中の工夫				
7. 板書や資料などの準備が十分になされた授業である	.73	-.10	.02	.46
2. 教師の熱意や意欲が感じられる授業である	.64	-.28	.34	.52
3. 要領よく進められる授業である	.62	.32	-.20	.55
4. 集中しやすい雰囲気づくりのなされた授業である	.49	.27	-.04	.45
5. 教師の話し方が明瞭で聞き取りやすい授業である	.46	.24	.13	.56
10. 学生が参加できるように工夫された授業である	.40	-.06	.18	.24
8. ついつい聞き入ってしまう内容の授業である	.39	.29	.10	.48
目標・基準の明示				
14. 成績評価の基準が明示された授業である	-.27	.76	.19	.53
13. シラバスに示された内容が満たされた授業である	.07	.65	-.13	.39
9. 学生の理解度が確認されながら進められる授業である	.04	.56	.00	.34
12. 目標、ポイントが明示された授業である	.18	.49	.18	.56
専門的・実践的な内容				
6. 教養や専門性を身につけられる授業である	-.02	.09	.76	.66
11. 自分の将来に役立つ授業である	.09	-.07	.58	.36
15. 新しいことを学べる授業である	.06	.21	.53	.52
負荷量平方和	4.68	4.46	4.10	
因子間相関	-			
	.66	-		
	.63	.62	-	

Table 4 授業満足度得点の3群別平均及び標準偏差、分布

尺度	群	人数	平均	標準偏差	分布(%)
授業満足度	高群	69	68.28	1.63	38.76
	中間群	59	63.02	1.60	33.15
	低群	50	54.62	4.58	28.09
参加・集中の工夫	高群	69	34.67	0.48	38.76
	中間群	63	32.16	0.85	35.39
	低群	46	27.28	2.60	25.84
目標・基準の明示	高群	56	19.64	0.48	31.46
	中間群	73	16.93	0.79	41.01
	低群	49	13.78	1.74	27.53
専門的・実践的な内容	高群	87	15	0	48.88
	中間群	35	14	0	19.66
	低群	56	12.16	1.06	31.46

Table 5 授業満足度と学習意欲低下の相関

尺度		学習意欲低下	下位尺度		
			学業意欲低下	授業意欲低下	大学意欲低下
授業満足度		-.22**	-.07	-.17*	-.25**
下位尺度	参加・集中の工夫	-.21**	-.04	-.17*	-.25**
	目標・基準の明示	-.17*	-.09	-.11	-.20**
	専門的・実践的な内容	-.20**	-.07	-.18*	-.19*

* p<.05 ** p<.01